

授業実践のひろば

地域の高齢者と一緒に考える八王子の未来

— 生徒と高齢者の協力・協働から —

二橋 拓哉*¹ 山崎瑠利子*²

*1 大阪樟蔭女子大学 (元 世田谷学園中学校・高等学校) *2 町田市立南成瀬中学校 (元 八王子市立横山中学校)

日本家庭科教育学会誌, 65(2): 91-96, 2022

1. はじめに

内閣府が発行した高齢社会白書(2021)によれば我が国の高齢化率は28.8%であり、生徒がこれからの時代を生き抜くためには高齢者と協力・協働していく力が欠かせない。

八王子市立横山中学校(以下「本校」と記す)では、2019年度より地域の高齢者を学校に招いて高齢者学習を実践した(二橋・山崎, 2020)。この実践において、授業者として初めは同じ地域に暮らしているにも関わらずどこか「他人同土」であった生徒と高齢者が、地域の問題について語り合う中で、「同じ目標に向かって自分の持てる知恵や力を出し合う共同体」へと変化していく様子を目の当たりにした。このことから高齢者との交流を通じて、生徒に「協力・協働」の概念を体験的に理解させることができるのではないかと考えた。

このような課題意識から、本稿では「生徒が協力・協働の概念を形成すること」を目標に高齢者学習を行ったため報告する。なお、本稿では二橋(2019)を参考に、「高齢者との協力・協働」を、中学生と高齢者それぞれが得意とすることを合わせて生活の問題を解決することと定義した。

2. 授業実践

本校は八王子市の住宅街に位置する中規模校で

ある。2014年度より地域運営学校(コミュニティ・スクール)に指定されており、学校行事などはしばしば学校と地域との共同で実施されている。二橋・山崎(2020)で高齢者学習を実践して以降、地域の高齢者は家庭科の授業に興味を示しており、2020年度に新型コロナウイルス流行に伴い、交流が中止になった際には大変残念がっていた。今年度も高齢者が来校時に、教員に対して「今年は(高齢者との交流が)できるのか」と話しており、彼らが授業で生徒と関わるのをとても楽しみにしている様子が伺えた。

本校には1年生に148名(男子75名, 女子73名)在籍している。長期欠席や病欠など事情のある生徒を除き138名(男子70名, 女子68名)を対象に、授業実践をした。

(1) 授業の計画

2021年11月から2022年1月、家庭科の授業を5時間実践した。授業の目標は、①自分の生活が、地域との相互の関わりで成り立っていることが分かり、高齢者など地域の人々と協働する必要があることについて理解すること、②高齢者と持続可能な地域・社会について話し合う活動を通して、高齢者など地域の人々と関わり、協働する方法について考え工夫すること、③問題を自ら発見・設定し、それを解決するための情報を収集・整理する活動を通して、持続可能な地域・社会の実現のために自分がすべきことをまとめること、の3点である。

次に、実践した授業の概要と学習目標について記す(表1)。第1時の目標は③と関連させて「高

(受付日 2022年3月11日/受理日 2022年3月29日)

Takuya NIHASHI Ruriko YAMAZAKI

* 1 〒577-8550 大阪府東大阪市菱屋西4-2-26

表1 実践した授業の展開

年月	時	○学習目標 ・ 学習活動	◎学習指導要領解説に示された内容 ◆高齢者の動き ☆指導・留意事項
2021年 11月	1	○高齢者と持続可能な地域・社会について考え、疑問（問題）を見つけることができる。 ・調理室と被服室に分かれて、席に着く。 ・アイスブレイクをする。テーマは「自己紹介」「昭和でよかった事」「令和になってなくなっていること」など。 ・「八王子市の未来について考える。」をテーマにディスカッションをする。 ・被服室に戻る。 ・話した内容を生徒間で整理させる。 ・話をして疑問に起こったことや、もっと調べてみたいことをまとめる。	◎地域の生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けてよりよい生活を考えること。 ◆調理室と被服室に分かれて、席に着く。 ◆4人班に1人ずつ入ってもらい、中学生と話をしてもらう。 ☆教員は、生徒から高齢者に質問をするように促す。 ◆待機室に戻る。 ◆生徒と話した内容を記録する。
	2	○第1時の学習から、疑問に思ったことについてテーマを設定し調べ、情報収集することができる。 ・前回の話から疑問に思ったこと、もっと調べてみたいことから、テーマを1つ決める。 ・テーマについてタブレット端末を使用して調査する。班で随時共有する。 ・高齢者に聞きたいことをメモする。	◎地域の生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けてよりよい生活を考える。 ☆調べたことは付箋に色分けして、プリントに整理していく。 (調べて分かったこと：水色、考えたこと：ピンク、疑問に思ったこと：黄色)
2021年 12月	3	○高齢者に調べたことや考えたことを共有し、アドバイスをもらい、自分の考えを深めることができる。 ・調理室と被服室に分かれて、席に着く。 ・調べてきたことを、高齢者の方に発表する。 ・もらったアドバイスを付箋に記入する。 ・被服室に戻る。 ・もらったアドバイスや新たな気付き、考えをまとめる。	◎家庭生活は地域との相互の関わりで成り立っていることが分かり、高齢者など地域の人々と協働する必要があることについて理解すること。 ◆調理室と被服室に分かれて、席に着く。 ◆4人班に1人ずつ入ってもらい、中学生と話をしてもらう。 ☆高齢者は、中学生が調べたことに対して質問やアドバイスをしてもらう。 ☆(高齢者からもらったアドバイス：緑色の付箋) ◆待機室に戻る。 ◆生徒と話した内容を記録する。
	4	○未来のためにこれから何が必要か、課題設定をし、さらに考えを深めることができる。 ・自分がこれまで調べてきたテーマとSDGsとの関連について整理する。 ・整理した内容をもとに、持続可能な地域・社会の実現のため、これから自分が追求していく課題を見つける。	◎高齢者など地域の人々と関わり、協働する方法について考え、工夫すること。 ☆SDGsの17の目標を提示し、生徒にとって当てはまりの良いものを選ばせる。
	冬課題	○設定したテーマについてレポート「未来のために考えよう！～これからわたしにできること～」をまとめる。	☆レポートは①設定したテーマについて調べて、分かったこと、気づいたこと、②関連のあるSDGsの目標とその背景、③これから自分にできことや生活の中で実践できることについて自分の考え、の3点を含むようにする。
2022年 1月	5	◎八王子の未来のためにこれから何が必要か、発表ができる。 ・冬課題レポートを班員同士で発表する。 ・班員をシャッフルし、生徒間で発表をする。	◎高齢者など地域の人々と関わり、協働する方法について考え、工夫すること。 ☆発表を聞いている生徒には、発表の内容を補い、また深める質問や指摘を考えさせる。

齢者と持続可能な地域・社会について考え、疑問(問題)を見つけることができる」である。授業では、地域の高齢者(70～84歳)を学校に招き交流会を実施した。高齢者の都合によりクラスごとに参加する者は違ったが、合計12名が授業に携わった。高齢者は生徒4人1組の班に各1名、計9名配置した。まず、アイスブレイクとして「自己紹介」「昭和でよかった事」「令和になってなくなっていること」をテーマに談笑した。ある班の活動を例に挙げると、高齢者が子供のころによくしていた遊びについて話し、中学生は自分が幼少期にしていたそれとの違いに気づいた。そして遊びの内容が違うのは、地域の環境が現在とは異なるからではないかと推察した。次に、「八王子市の未来について考える」をテーマにディスカッションをした。その際、教員は生徒から高齢者に気になったことを質問するように促した。先の班を例に挙げると、公園の数や広さなどが話題に上がり、現在の八王子は子供の遊び場が十分に確保されているのか話し合った。最後に、生徒は高齢者と話をし疑問に起こったことやもっと調べてみたいことをまとめた。

第2時の目標は③と関連させて「第1時の学習から、疑問に思ったことについてテーマを設定し調べ、情報収集することができる」である。授業で生徒は、まず前回の話から疑問に思ったこと、もっと調べてみたいことから、テーマを1つ決めた。次に、テーマについてタブレット端末を使用して調べた。その際、調べたことは付箋に色分けしてプリントに整理した。さらに、調査した内容を班で共有し、調べてもなお分からないことを、次の授業で高齢者に聞くためにまとめた。

第3時の目標は①と関連させて「高齢者に調べたことや考えたことを共有し、アドバイスをもらい、自分の考えを深めることができる」である。授業では、第1時と同じく地域の高齢者を学校に招き交流会を実施した。高齢者は生徒4人1組の班に各1名、計9名配置した。第2時に調べたことを発表し、また調べても分からないままの事を高齢者に質問した。高齢者は中学生が調べた

ことに対して質問やアドバイスをした。ここでは、可能な限り第1時と同じ高齢者を配置し、高齢者が生徒の思考の深まりを感じ取れるように工夫した。中学生は高齢者からアドバイスされた内容を付箋に記入した。最後に、本時を通じて新たに気付いたことや考えたことをまとめた。

第1時と第3時に行った交流において、高齢者は、自分の問題意識を踏まえて中学生が何か解決策を見いだしてくれるかもしれないという期待をもって、彼らの発見した問題に対して熱意ある助言をしたり新たな方向性を示したりしていた。これは、高齢者が中学生を「重要な文化の変化の担い手」だと捉えているからではないかと推察する。中学生も、高齢者のアドバイスを受けて、自分たちにできることは何か主体的に考える様子が見てとれた。本稿では「交流」という言葉を用いているが、その様子はさながら「地域の問題解決のために異世代が集まり戦略会議を行っている」ようであった(写真1)。このような活動は二橋(2019)の「高齢者との協力・協働」を体現したものと考えられる。



写真1 高齢者からアドバイスを受ける生徒(第3時)

※感染症予防の観点から、被服室と調理室を使用しているため、写真に写った生徒の数は通常の半数である。

第4時の目標は②と関連させて「八王子の未来のためにこれから何が必要か課題を設定し、さらに考えを深めることができる」である。授業では、まず自分がこれまで調べてきたテーマとSDGsとの関連について整理させた。次に、その内容をもとに、持続可能な地域・社会の実現のためこれから自分が追求していく課題を考えさせた。

冬休みの宿題では、4時間目で考えた内容を班内で発表できるように準備をさせた。その際、4

時間目で調べきれなかったことがあればタブレット端末や書籍等でさらに調べるように指導した。

5時間目の目標は②と関連させて「八王子の未来のためにこれから何が必要か、発表ができる」である。授業では、まず冬休みの宿題として作成したレポートを使用して班内で発表をさせた。その際、発表を聞いている生徒には、発表者の話す内容を補い、また深める質問を考えさせた。次に、班員をシャッフルし、生徒間で発表をさせた。使用したプリントを写真2に示す。

握し、対話を通して学習者の思考のいきづまりを支援している。

(3) 地域の高齢者との連携

高齢者の選定はボランティア・コーディネーター（二橋・山崎, 2020）が行い、元自治会長や元市議会議員、元教員など、職業生活等で長年活躍してきた高齢者に参加してもらえるよう手配した。授業に参加した高齢者は地域の問題に関心が高く、生徒が八王子市の未来について考える上でも議論に深まりが期待できる。

授業実践前に、教員が高齢者を対象に事前説明会を実施した。教員は、高齢者が授業に参加する意義として「生徒が高齢者の人生経験に由来する『生きる知恵』に触れることを通して、自身も地域社会の一員であることに気づき、地域の人々と協力・協働する方法について一層考えられるようになる」と口頭で説明した。その際、授業の実施要項を配布した。そこには、授業の目的・授業の展開（表1）・実践的行為を支える「問い」を掲載した。以上の手立てにより、教員と高齢者の間で生徒に何を体験させ、どのような学びをさせたのか共有した。

また、高齢者の都合により第1時と第3時で同じクラスを違う高齢者が担当することがあった。そこで、授業の直前に前回の授業で生徒が何を考えたのか、授業で使用したプリントを指標に打ち合わせを行い共有した。

3. 授業の様子

(1) 生徒の学びの様子

授業実践後、生徒の学びの深まりを「協力・協働の概念の理解」の観点から検討した。ここでは2人の生徒（以下、降順にA・Bと表記する）が5時間の授業を通じてどのように学びを深めたのか、彼らの記述したプリントを指標に検討する。なお、生徒の記述を引用する場合は斜体で表記する。また、第5時の主たる活動は生徒間の発表であるため、生徒のプリントの記述は第4時までのものである。

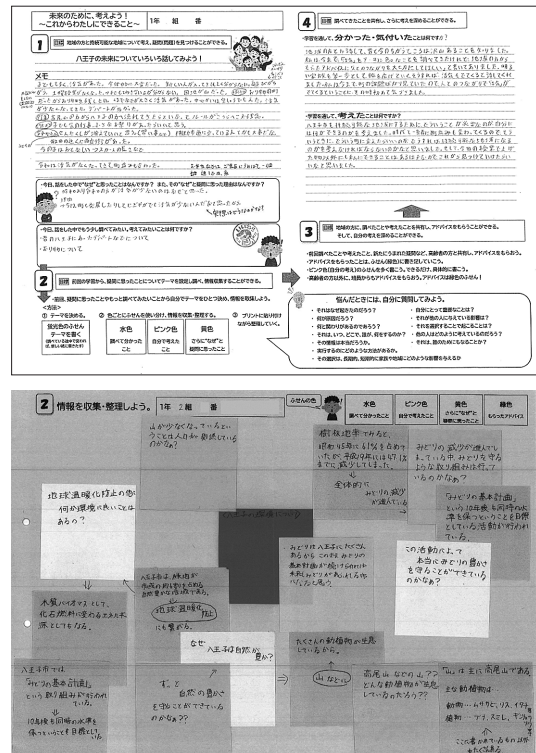


写真2 授業に使用したプリント

※個人情報保護の観点から、それに関連する箇所を消している。

(2) 実践的行為を支える「問い」

生徒が高齢者との対話や調べ学習等を通じて地域の問題に気づき多角的に検討できるように、荒井他（2009）を参考に授業プリント（写真2）内に「悩んだ時には自分に質問してみよう」を掲載した。授業中の活動において生徒は学習にいきづまった際に自分自身に問いかけ思考を整理する。また、教員も机間指導において学習者の状況を把

1) 生徒Aの学び

1時間目に高齢者とのディスカッションを通じて、Aは「子供が多く活気があった」「子供会の行事、小さなお祭りがたくさんあった」「令和は活気がなくなって町並みも変わった」などとメモした。授業の最後に「昭和より令和の方が活気が少ないのはなぜかと思った」と問いを立てた。また、調べてみたいこととして、「昭和と令和の活気の違い」「八王子の少子高齢化」を挙げた。

2時間目の調べ学習では少子高齢化に着目し、「子育てがしにくい町だという調査結果」「通勤・通学の利便性があまりよくない」「住宅価格が高い」という情報を見つけ、「よって高齢者の多い町になる」「若者が住み続けたいと思う町づくりをしなければならない」と考えた。

第3時に調べたことを発表し、高齢者から、「地域とのつながりを大切にしてほしい」「明るい家族が第一歩」とアドバイスを受けた。

第4時に、学習を通して分かったこと・気づいたこととして「(略) 私は、今まで『活気』をテーマに色々なことを調べてきたけど、地域の方からもらったアドバイスに『人とのつながりを大切にしてほしい』と書いてありました。(略) 私は今まで町の課題ばかり見ていたので、人とのつながりで『活気』が出てくるということにその時初めて気づきました。」と記した。また、考えたこととして、「時代と一緒に町並みも変わっていくので、そういう時にどう町を変えていけばいいか考えなければいけないと思いました。」と記した。

Aは第1時で高齢者から昭和の話聞き、昭和は令和と比較して「活気」のある町だったと感じた。これは昭和の時代を生きた高齢者から話を聞かなければ気づけなかったことである。また、第2時には自分のクラス地域の子育て環境や住宅価格等に注目していたが、第3時に高齢者から「地域のつながり」や「明るい家族」といった新たな視点に気づかされた。ここは、高齢者が自分の人生経験を踏まえて「活気」について考えるのであれば、人とのつながりと視点にするとよい、とアドバイスをしている場面である。それを受けて第

4時には自分が新たな時代の担い手であることに気づき、地域社会の問題について主体的に考えようとする態度が伺えた。以上のように、高齢者は自分の人生経験を踏まえて自分に語りかけ、Aは新たな時代の担い手として主体的に考える過程で、協力・協働の概念を形成したと考えられる。

2) 生徒Bの学び

1時間目に高齢者とのディスカッションを通じて、Bは「昭和は挨拶など地域の交流が多かったが、令和で少なくなってしまった」「地域の人たちで助け合い、つながり、楽しいことが多かった」などとメモした。授業の最後に「どうして地域のつながりが弱まってしまったのか」と問いを立てた。また、調べてみたいこととして、「地域のつながりが弱まった理由」を挙げた。

2時間目の調べ学習では「地域のつながりは本当に弱まってしまったのか」に着目し、「町内会・自治体への参加頻度」を調査した。活動を通じて「楽しい交流だけでも参加出来たら顔見知りになるから助け合いができるのではないか」「回覧板を回すときとかに色々話したりして交流を深められる」と考えた。

第3時に調べたことを発表し、高齢者から「地震の時に助け合うためには、挨拶などは絶対にしておいた方がいい」とアドバイスを受けた。

第4時に、学習を通して分かったこと・気づいたこととして「(略) 高齢者からのお話は昔のことでリアリティがあって、さらに変化したことが分かりやすかったです。気づいたことは、(略) 防災グッズを準備したりすることです。(略) 自分ができていることをすることで、地域の一人一人が責任を持つことができると思いました。」と記した。また、考えたこととして「色々な人と交流することで協力でき、これからの地域がさらに良くなると思いました。(略) これからの八王子をよくするために、自分について発信することで、周りにも伝わると思いました」と記した。

Bは第1時で高齢者から昭和時代の話聞き、令和と比較して「地域の人とのつながり」が弱まったという問題を発見した。2時間目の調べ学習

では解決策として「楽しい交流」「回覧板」を見出したが、3時間目に高齢者から、地域とのつながりは災害時に助け合うために重要である、と新たな視点を与えられた。Bにとって高齢者からのアドバイスは経験に基づいたリアリティのあるもので、地域とのつながりを持つ重要性に気づいている。第4時には地域社会とのつながりを積極的に持ち、自分ができることをしようとする意欲が見て取れた。以上のように、高齢者のアドバイスを受けて自分にできることを主体的に考えている様子から、Bは高齢者との交流を通して協力・協働の概念を形成したと考えられる。

(2) 授業に参加した高齢者の感想

第3時が終了した直後に、授業に参加した高齢者に対して感想を自由記述で書いてもらった。以下に内容を示す（一部抜粋）。

- ・「地域とのかかわり」は子供にばかり求めるのではなく、私たちこちら側からも声をかけるようにしなければ、と考えました。
- ・八王子の郷土料理等、私の知らないものもあり、いろいろな場面でこちらが勉強させられました。
- ・地域の良さが何なのか。人であつたり環境であつたり。この時間を大切に、横山中学とともに成長の一步としたいと、若者の考えに触れて感謝するのは私でした。

以上の記述からは、高齢者は生徒の学びを深める支えとなるだけでなく、生徒と対等な立場からお互いの得意とすることを出し合い、地域の問題について考えていた様子、言い換えれば、協力・協働していた様子が読み取れる。

4. まとめ

本稿では生徒が高齢者との交流を通して協力・協働の概念を形成することを目標に高齢者との交

流を実践し、授業実践のプロセスと授業時の生徒の学びが深まる様子を報告した。

最後に、本稿で得られた成果を以下に記す。二橋他（2021）では、生徒は地域や高齢者に対して自分ができることは何か慮る様子が伺えた。この実践では、第1時で高齢者と関わる職業に従事している方の講話を聴くことで、その後の生徒の問題意識が高齢者の支援に偏っていることが推察された。本稿での実践では高齢者は「生徒を重要な文化の変化の担い手と捉え、これまでの人生経験を踏まえて生徒に新たな視点を与える存在」であり、生徒も次世代の地域社会を担う者として自分にできることは何か主体的に考える様子が伺えた。以上のことから、生徒は協力・協働の概念を体験的に理解できたのではないかと考えた。

本校は地域運営学校であり、こうした実践をする上で恵まれた環境にあった。今後の課題として、地域運営学校以外の学校でも授業実践をしていきたい。

引用文献

- 荒井紀子・鈴木真由子・綿引伴子. (2009). 新しい問題解決学習：Plan Do Seeから批判的リテラシーの学びへ. 教育図書.
- 二橋拓哉. (2019). 中学校家庭科における高齢者学習の変遷と今後の課題：中学校家庭科学習指導要領解説と中学校家庭教科書の記述分析から. 日本家庭科教育学会誌, 61, (4), 215-224.
- 二橋拓哉・山崎瑠利子. (2020). 中学校家庭科における高齢者学習の実践：「多様な高齢者の理解」「高齢者との協力・協働」を視点として. 日本家庭科教育学会誌, 63, (3), 151-156.
- 二橋拓哉・山崎瑠利子・坂詰悦子・大木真理奈・結城遥. (2021). 中学校家庭科高齢者学習の実践：問題解決学習を手法として. 日本家庭科教育学会誌, 63, (4), 203-214.
- 内閣府. (2021). 令和3年版高齢社会白書. (https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf_index.html). (2022年2月7日アクセス).